

令和 5 年度 hug くむ保育園大岩評価書

I 経営の重点に関わる事 評価段階 (A:大変良い B:まあまあ良い C:あまり良くない D:全然良くない)

1. 園教育 (卒園目標): 社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標: 「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標: 「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	子どもたちが安心して過ごせるよう、好きな遊びやスキンシップを多くとる等、丁寧に関わることができた。初めて担任になった職員もいたので、担任との愛着形成ができるよう、周りの職員がフォローしたり、環境をどのように整えるか一緒に考えたりできるとより良かった。	B
	人や物に関心を示し(気づき)探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	探索活動が安心してできるように常に抱っこではなく、遊びを見守り、保育者の元に戻ってきた際、できたことを認める声掛けをすることができた。また、給食ではデザートのお菓子をカウンターに並べたり、イベント時の盛り付けを工夫したりと、食への興味・関心が広がるように努めた。	A
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	子どもたちの表情から気持ちを汲み取り、受け止めたり、代弁したりと、丁寧に関わることができた。月齢差を考慮し、それぞれが満足できるように活動内容をより深く考えていけると良い。	B
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。(行動しやすいよう促している)	スモールステップを取り入れたり、自分で考える場面をつくったりすることで、子ども自らが“できた”と達成感を得られるように配慮している。子どもたちが「～したい」と思えるような活動内容を計画することが不十分であったため、子どもたちが行動しやすいよう計画を立てられるとより良かった。	B
	行動によって生じた結果に対し、自己肯定感(自己有能感)を持つ事ができるよう向き合っている。	前向きに行動を捉え、小さなことでも十分に褒め、自己肯定感が高まるように関わることができた。また、子どもが失敗したと感じる場面でも「～は上手にできたね」と結果より過程を認めている。	A
	お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。	他児の表情に注目し相手がどのような気持ちなのか一緒に考えたり、見通しがもてるような問いかけをしたりと、子ども自らが考えられるように関わることができた。言葉で理解することがまだ難しい0・1歳児に対しても対応を考えたい。	A

2. 保育方針		
評価指標	評価	自己評価
根拠に基づく保育を実践します。	疑問点や不明点を調べるという習慣が身に付いた職員がいた一方、その意識が職員によって差があった。自身が学んだことを他職員へも伝えたり、一緒に実践したりすることで、職員全員で知識を深めていけると良い。	B
子ども自身の発達状況や個性を尊重します。	1人ひとりの今の成長を見ながら、どのように援助していくのが良いか考え、他職員と共有することができた。また、環境・遊び・声掛け・援助を、子どもたちの様子をヒントに変えている。	A
子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。	子ども自身が納得して行動できるよう関わっている。月齢に関係なく、子ども自らが行動できるタイミングを見るようにしている。	A
子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。	意識はできているが、子どもと保育者との一对一での対話が必要な場面で周りの職員がサポートできるよう、連携できるとより良いと考える。	B
「いいところ見つけ」を心がけます。	保育者間では、「いいところ見つけ」をしたら、他職員と共有し、子どもをたくさん褒める場面をつくることができた。また、子ども同士では、保育者が子どもの「いいところ見つけ」をしたら、すぐに声に出し子どもたちに共有することで、“じぶんも”と思えたり、自然とお友だちの「いいところ見つけ」ができるようになったりした。	A
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	「やってみたい」という気持ちももてるよう、ワクワクするような導入や保育を心掛けたり、子どもたちの「やってみたい」から次の活動を考えたりするようにしている。また、0歳児は特に“はじめて”の場面が多いため、繰り返し同じ内容を取り入れ、意欲を育むようにしている。	A

II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	季節ならではの遊びでは、1人ひとりに合わせた環境作りを行い、子どもたちが楽しいと感じられる工夫をしている。保育者によって知識・技術に差があったため、周囲がアドバイスしたり、事前に一緒に考えたりできるとより充実し、子どもたちが満足できると考える。また、給食では、家庭での様子に合わせてたり、食具が使いやすいかたりする食形態を、発達を考慮して提供している。	B

	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	1人ひとりに合わせたリズムにすることで、子どもたちが無理なく園生活を送れるようにしている。また、保護者との信頼関係を築きながら、子どもたちの様子を共有し合い、子どもたちにとって最善の援助は何か考えている。	A
	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	子どもの成長につながるような遊びを提供したり、環境構成を工夫したりすることを意識したが、指摘されることが多く、職員間でその都度改善するための話し合いを常に実施していきたい。食事の面では担任と調理員が連携をとり、にぎる・つまむ・すくう・箸を使う等成長につながるように大きさを工夫している。	B
安全管理 ・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作成し、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	危機管理に対する意識は職員間で差があり、特に怪我については、人的要因で起きる事案が多かったにも関わらず、毎月のアクシデント・インシデントについての検討会では、物的要因についての意見が多く挙がった。物的要因だけでなく、“保育者自身の働きかけはどうであったか”という視点で考えることで、子どもたちの命を守っていきたい。	C
保健管理 ・指導	生命の保持	<ul style="list-style-type: none"> 安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理を行っている 「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な形で食に関わる体験ができるよう工夫している。 	安定した生活リズムで過ごせるよう、保育を見直す必要がある。そのためには、担任だけに任せるのではなく、話し合いの場で積極的に意見を出し合い、保育者自身が子どもの姿や生活リズムに見通しをもち、生活リズムを整え、安定した園生活を送れるようにしていく。	C
	健康教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> 園児の健康状態の把握に努めている 園児の発育・発達状況の把握に努めている。 園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指導をしている。 	健康状態、発達・発育状況の把握に努めている。子どもの生活習慣に関しては十分に行うことができなかった。感染症が流行しているため、手洗い・うがい・歯磨きは行えるようにしていきたい。その時間を確保するために日常の保育での生活リズムから改善していくことが必要である。	C

特別支援教育	支援体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。 ・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の研鑽に努めている。 	<p>“全職員で”というところは、課題が残る。保育者によって理解度が違ったり、知識不足による適切な援助ができていなかったりする職員がいた。“できなかった”で終わるのではなく振り返りや自学を惜しまず、誰が援助しても同じ援助ができるよう周囲のサポートも必要である。</p>	C
組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。	<p>不明なことや疑問に思ったことについて自分で考えるのではなく、すぐに相手に答えを求めようとする職員の姿が多々あった。まずは園運営について自身でどのように考えているのか明確にした上で、意見交換ができるとう良い。また、割り振られた業務だけ行うのではなく、自分は組織のために何ができるかを考え実行する力もつけたい。</p>	C
研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができています。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究を行っている。	<p>内部研修に力を入れた1年だった。法人内で講師を立て、フィンランド式キッズスキルの理解度を深めたり、基礎を皆で学び直したりと充実していた。</p>	A
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	<p>職員や子どもたちが“楽しい”と思えるような保育ができるように保育者間で連携をとるようにしている。さらに良くしていくためには人員や時間が必要となってくる。職員全員が“より良い保育をする”“楽しく保育をする”という意識を持ち、準備や相談に使える時間が増えると良い。</p>	B
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	<p>家庭環境への支援機能の充実をさせるためには、普段の保護者とのコミュニケーションが大切だと考えている。そのためには、保護者からご相談事に対して、適宜園長・主任へ相談し、スピード感をもって解決していくという意識を皆でもち対応していきたい。</p>	B
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	<p>新年度がスタートしてすぐ安東こども園へ訪問し、園庭で遊ばせていただいたり、進級に向けて室内を見学させていただいたりと定期的に訪問する機会を設けた。園庭で遊ぶだけでなく、安東こども園の園児さんたちと一緒に遊ぶ経験ができるような活動内容があるとより良かった。</p>	B

地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	創立 10 周年を機に、地域の方と交流させていただけたことが良かった。また、園開放に来てくださる方も多く、入園につながった方もいらした。	A
--------	--------------	-----------------------------------	--	---

III 園としての保育の総括

近年課題である、保育者の知識・技術の不足による保育の質向上が目標であった 1 年だった。保育の質を向上させるためには、子どもを理解し、それに応じた援助や配慮を考え実行しなければならないが、保育者にスキルの差があるため、実行力に差が出ていることが現状である。保育者のスキルアップは必要であるが、その間にも子どもたちは成長しているため、お互いにフォローし合い、連携を密にできるとより良かった。

一方で、立場が変わったことにより、全体を見ることが出来るようになった職員もいたため、個々においては成長を感じられた。

次年度においては、組織力をさらに高め、個々においてもスキルアップを急務としていきたい。

また、保護者様より、戸外遊びを増やしてほしいというご意見があったので、園内はもちもん園外での危機意識を保育者間でより深め、どの保育者でも子どもたちが安心して戸外遊びが実施できるよう指導を強化していきたい。

IV 園としての経営の総括

今年度は、2 歳児に空きがあったものの、概ね安定的に園児獲得ができた。園児を安定的に獲得できるよう、次年度も外部へ向けたアピール方法を考えていきたい。また、離職率が年々減少しており、定着率を上げていることも評価したい。園としては、引き続き離職率 0 を目指し、職員が働き続けたいと思える職場環境をつくり、お互いにフォローし合い、想いを伝え合い、職員 1 人ひとりがスキルアップしていくことが次年度の課題である。そのためには、個々に自学を惜しまず、フォロー体制としては、職員 1 人ひとりの能力に合った伝え方や実践方法を模索することで、子どもたちに還元していきたい。

年々、保育業界を取り巻く環境は厳しくなっているが、hug くむ保育園では遊びや生活を充実させ、子どもたちが 1 日を通して満足感をもって過ごせる環境を整え即実行することを目標としたい。